

# 月のしずく

浅田次郎



文藝春秋

月のしずく

江苏工业学院图书馆  
藏书章

文藝春秋

# 月のしずく

一九九七年十月三十日第一刷  
一九九七年十二月五日第四刷

著者 浅田次郎

発行者 和田宏

発行所 株式会社 文藝春秋

東京都千代田区紀尾井町三―二三  
電話代表〇三〇三三六五―二二二一

印刷 凸版印刷

製本所 加藤製本

定価はカバーに表示してあります  
落丁・乱丁の場合は小社営業部にて  
送料・当方負担でお取替え致します

目次

月のしずく

5

聖夜の肖像

65

銀色の雨

107

琉璃想

リウ  
リイン  
シアン

143

花や今宵

187

ふくちゃんのジャツク・ナイフ

237

ピエタ

269

装画 佐々木悟郎  
装帧 木本百子

月のしずく



月のしずく





いいか、ぼうず。俺アべつに、酔っ払って説教たれてるわけじゃあねえんだぞ。

こうしてぶうらぶら国道を歩いて帰るのも、車代を儉約してるわけじゃねえ。銭ならほれ、まだこんな持ってらあ。

なんだってきようは十五夜さ。いくら給料あとで懐があつたけえからって、いつもみてえに酒飲んで女買つて、それじゃああんまり能がねえだろ。

そりゃあ、おめえらの気持はわからんでもねえよ。コンベアの流しかたも、パッキンの裏表もよくわからねえような大学出の監督に、ああせえのこうせえの言われるのはたまらねえ。

したつけ、考えてもみな。あいつらはみんな一年もすりゃ東京の本社に戻ってネクタイ締めるんだぜ。その点おめえは、学歴があるわけじゃなし、ほかに取柄があるわけじゃなし、俺みてえに二十何年もパッキン担げとは言わねえが、ま、当分は第六工場から出ることアあるめえ。班長

や指導係に睨まれるだけ損でことだ。

もうちょっと大人になれて。若い監督ぶん殴って、そりゃあ当座は気が済むかもしれねえけど、長い目で見りゃ得なことはひとつもねえ。

六工のパッキン積みも悪かねえぞ。二十何年も同じことやってる俺が言うんだから、まちがいはねえ。給料だっておめえ、俺の若い時分とは月とスッポンだ。

信じられつか。俺がおめえの齡にゃ、手取りで三万なんぼ、酒も飲めねえ、女も買えねえ、週休二日なんて夢のまた夢だった。それでも俺みてえな中卒の、読み書きも満足にできねえのはよ、ここいらじゃコンビナートに行くか自衛隊に入るかしかなかったんだ。

やめたって、ろくな仕事はありやしねえよ。黙ってたって三年勤めりゃ、フォークの免許と危険物取扱ぐれえは取らしてくれる。うまくすりゃ大型一種だ。やめるんならそれからだって遅くはねえし、そのころにゃ小金もたまってるだろ。

そりゃあ、つまらねえ仕事だよ。朝から晩まで、えっちらおっちらパッキンかついで、トレーラーに積んでよ、要するに昔で言うなら沖仲仕だな。船が車になっただけのこった。だがそれを言うんなら、面白え仕事なんて、世の中そうそうあるもんじゃあねえぞ。

ましてやおめえらは、いい給料もらって、土曜も日曜も休みで、不満なんか何ひとつねえはずなんだがなあ。

俺のこと考えてみる。四十三だぞ。おっかあもいなけりゃ子供もいねえ。あたりめえだけど。独り者だから社宅にも入れねえ、手当だって何もねえんだ。てことはおめえ、三十年ちかくも勤めて、おめえらと給料がちがわねえんだよ。ブルーカラーの悲劇ってやつだよなあ。そんで、工

場でござたがあつたときにゃ、いつも仲裁役だ。何で俺が班長や監督に頭下げなきゃならねえの。おめえらに身銭きって酒飲ませにゃならねえの。

やつらもやつらだ。タツつあん、あとよろしくなつて、どういふこつた、それ。

根本班長と俺が同期の入社だつて、知つてるか。知らねえだろう。何でこんなに差がついちまつたかというどだな、つまりあいつは高卒で俺が中卒。あいつが所帯持ちで俺がチョンガー。それともうひとつ、あいつはりこうで、俺はバカ。

まったくバカなんだよなあ。てめえで言うのも何だけど。

口は達者だけど、字が書けねえだろ。カタカナとヒラガナしか。計算とかもできねえしよ。できることつていやア、五キロのパッキンをよ、五の十で五十のワンセット、三セットの百五十を、きつちりすきまなくトレーラーに積むことだけだ。

それなら自信あるぜ。計算しなくたつて体で覚えてるからな。二トン半のアルミバンが来たつて、十トンのトレーラーが来たつて、ぜつたい崩れねえように積めるもんな。そのテクニクだけはよ……おい、笑うな。

そのテクニクだけは、まず六工じゃ右に出る者はいねえ。いいや、会社の中にもいねえ。コンピナートせんぶ見渡したつて、誰にも負けやしねえさ。

——ああ、それにしてもいい月だなあ。

俺がガキのころにはよ、ここいらに工場なんてひとつもなかつた。国道の脇は堤防で、その向こうはずつと海だつた。

爺いも親父も漁師でよ——嘘じゃねえつて。俺もガキの時分にゃ親父の手伝いで舟に乗つた

んだ。

今から思や、何で埋立のとき反対しなかったんだらうな。みんなたかだかの錢に、目がくらんじまったってわけさ。錢なんざすぐに消えてなくなるのになあ。

海さえありゃあ、おめえ、誰に頭下げることおねえし、サイレンに追っかけられて仕事することもおねえし、第一、食うに困らねえよ。埋立さえしなけりゃ、まだここいらは鰯でも鰯でも浅蜆でも、てめえの食いぶち以上には獲れてるはずなんだ。

海を売ったたかだかの錢なんて、俺ア見てもいねえ。どうしたかって？……さあ、どこへ行っちゃまったんだらう。あのころア、親父も近所のやつらもみんな、天下取ったみてえにうかれやがって、毎日競馬だア、競輪だア、酒だ、女だって遊び狂っていやがったからな。

おかげさんで、倅が中学出るころにやすかんびんさ。県立を落ちたら、コンピナートへ行けてやんの。定時制に通わしてくれっから、高い錢はらって私立に行くことなんかおねえって。ところがどっこい、朝から晩まで腰の抜けるほどパッキンしよわされてよ、誰がそのあと学校なんか行く気になるもんかね。

そうそう、あのころにやまだ、搬出場にターミナルができてなかったんだ。だからコンベアで上がってきたパッキンはよ、いったんフォーク・リフトに積んで、六工と五工の間の狭い路地を抜けて、ほれ、いま事務棟になっているあたりにな、出荷センターっていうバカでけえプラットホームがあつて、そこで積載したんだ。

俺たちを「蟻ン子」って呼ぶのア、そのころのなごりだな。フォークと一緒に狭い路地をゾロゾロ歩いて、パッキン積んで、またゾロゾロ工場に帰ってくる。だから蟻ン子さ。

今じゃゴキブリ?……ハハッ、そいつアいいや。ターミナルのデッキの上をチヨロチヨロ走り回るから、ゴキブリか。

だが、ゴキブリも数が少なくなったもんだ。俺たちのころにゃ、一工から六工まで五十人ずつ、ええと、五、六の三十か。三十人? いやちがうな、三百人か。ともかくそのぐれえの蟻ン子がいた。

今は何人だ。六工が十八人だろ。三工までは搬出ラインができ上がってるから、蟻ン子はいねえ。四と五と六で、ええと——ま、だいたい五十人かそこいらか。

それにしたって、半分以上は外国人になっちまったな。ばかくせえっていう、おめえの気持は、まあわからんでもねえ。

ラインが完成したらどうなるんだ、え? お払い箱か。まさかな。今さら働き口なんてあるわけねえし、おめえら若い者はともかく、俺の居場所はきちんとしておいてもらわなけりゃ困る。守衛でも、焼却場でも、食堂の賄いまかでも何でもいいや。

ああ——それにしてもいい月だな。

こういう晩は、野郎二人で歩くもんじゃないね。

若い娘なんて、贅沢は言わねえよ。せめてかみさんがいたら、手でもつないで、こういうお月さんの下を歩いてえ。

プスでもデブでも何でもいいよ。やらしてくんなくたっていいき。どんなのだったって、かみさんになつてくれりゃ、大事にするんだがなあ。

……アレ。どこ行っちゃった。

なんだよオ、俺ずっと独りごと行ってたんか……。

2

三十年ちかくもコンピナートの荷役かえきをして、その間に何ひとつと書いてもいいほど変わりばえのなかった佐藤辰夫の生活に、椿事が訪れたのは、秋も初めの十五夜の晩だった。

なかぞらに貼りつけられたような満月が、トラックの行き交う国道をまっさおに染めていた。湾岸コンピナートは十キロも続いている。満艦飾の灯りをともした高炉があちこちに立ち上がり、煙突の先端からはオレンジ色の炎が吐き出されている。

ふるさとの海の上ででき上がったこういう風景が、辰夫は存外嫌いではなかった。そこには造り物の安心感があった。

渚はコンピナートになり、砂利道の国道は片側三車線の産業道路となり、松並木はいつの間にか伐り倒されて、分離帯にバームツリーが並んだ。

田圃も畑もきれいさっぱりなくなつて、マンションと建売住宅になった。海岸線はコンピナートの敷地の先に何キロも遠のいてしまったから、東京湾の対岸の灯も、三浦半島や丹沢の山なみも見えない。

郷愁を喚よび醒ますことのないふるさととは、見知らぬ異国と同じだった。

だが、その晩だけは十五夜の満月が、昔を思い出させてくれた。最終のバスをやりすごして歩いて帰る気になったのは、若い者を説教するためではなかった。のどかな漁師町のころとどこも

ちがわぬ満月が、夢見ごこちに辰夫を歩かせた。

運河にかかるアーチ橋の上で、辰夫は月を映しこむ水面を覗きながら一服つけた。

昔、この運河は漁船の舟溜りだった。コンビナートで働き始めたころは曳舟タグボートの繋留場所だった。やがて海運が陸送にとって替ると、たちまち都会からやってくる金持ちたちのクルーザーで埋まった。

すべてがそんなふうに変わってしまうのだから、喪うしなわれていくものへの愁いなど感じるひまはなかった。たとえば、ぼんやりと映画を覗いているようなものだ。

——車の止まる気配がして、辰夫は振り返った。

自分の説教に愛想をつかして逃げた若者が、車で送りに来てくれたのかと思つたが、そうではなかった。少しさきの橋の上に急停止したのは派手な暴走グループの車ではなく、シルバー・グレーのベンツだった。

長いショールひらかえを翻して、女が降りた。ドアを閉めかけて、何ごとか口汚く罵る。女は怒っている。

辰夫は手すりから身を起こして、思わず、「うわ。いい女だなア」と独りごちた。

ショールから抜き出た腕はまばゆいほど白く、髪を結び上げた顔かたちが、遠目にも美しかった。何の採めごとか知ったことではないが、怒りに吊り上がった眉が、またいい。

車の中から男の怒鳴り返す声をした。どういう悶着にせよ、何とまあ贅沢な男だろうと辰夫は思った。

女は思いきりドアを閉めると、車の後ろに回って品川ナンバーのプレートを蹴った。それから



黒いドレスの裾を太腿までたくし上げて、ガードレールを踏み越えた。

運転席から男が降りてきた。いかにもベントとワンセットという感じの、派手な男だった。

「へえ」と辰夫は妙な感心をした。まったくテレビドラマだ。折よく車の往来がとぎれて、二人のやりとりがはっきりと聴こえた。

「いいかげんにしろよ。こっちが甘い顔してりゃつけ上がりやがって」

「ふん、あんたに亭主ヅラされる覚えはないわ。じゃあね、バイバイ」

「それだけか。さんざいい思ひして、ありがともごめんなさいもねえのか」

「いい思ひしたのはどっちよ。ふざけるのもいいかげんにして」

男はいきなり女の二の腕を引き寄せて、頬を殴りつけた。ごつんと音がして、女は舗道に倒れた。

「あっ」と辰夫は声を上げたが、仲裁に入ろうなどとは考えなかった。あまりに突然のことで、テレビと現実との区別もつかなかった。

「ひでえことするなあ……」

倒れ伏した女に向かつて、男はさんざ悪態をついた。運転席から手提げ鞆を取り出し、乱暴にひと掴みの札束を抜き出すと、女の上に撒き散らした。

「盗ッ人に追い銭か。頭ひやしたら電話しろ、きょうのことは忘れてやる」

ベントは唸りを上げて行ってしまった。

むっくりと身を起すと、女はまず乱れた髪を解いた。首を振って長い髪を解き落としてしまうと、べつにあわてるふうもなく身の周りに散らかった札を集める。